

## 屈原を祀る時、尊んでいるのは何か

屈原は「美政（立派な政治）」を提唱し、国内政治の面では健全な法律制度を策定し、国外政策の面では齊と連携し秦に立ち向かうことを主張した。後に貴族から排斥され、沅水・湘水流域に追放された。しかし、屈原は戦士のごとく自身の理想を守り、君子の道を貫き、世俗の穢れが自らの高潔で品位ある人格を汚すことを決して許さず、その人生において自身に一瞬たりとも気の緩みと諦めを許さなかった。

屈原は自らの名をもって、追求した道德規範を表明している。『離騷』の冒頭には、「父は私に正則と名づけ、字を靈均と呼んだ」と書かれている。「正則」とは正直であること、態度や行いが立派で、人としての基本を守るということであり、「靈均」とは賢さ、知恵、公正と正義を意味する。屈原は『橘頌』という作品の中で、「何物にも頼らず、独立してしっかりと立ち、遷ることがない」橘の木の例を借りて、自分の人格と情操を表現した。つまり、心に抱く美しい理想のためには、決して同調も妥協もせず、たとえ死んでも後悔しないということである。屈原はあたかも楚国の高き空に住み、世間の入り乱れる様子をすべて鳥瞰しているかのように、心中では状況を見通しているにもかかわらず、実際にはどうすることもできなかった。

屈原の千古の志は、その文学作品と政治的抱負が常に民の立場に立っていたということにある。その偉大さは、常に国を憂え民を憂う悲しみと哀れみの心を強く抱き、強い愛国心を持っていたことにある。

屈原の事績や作品が人々の暮らしと結び付き、重要な伝統的祭日で祀られる対象となっているのは、屈原の言動には国や民、そして故郷の文化に対する限りない愛情が感じられ、その中に民族精神及び文化の不朽の力が深く刻み込まれているからである。「国に人無く我を知る莫し、又何ぞ故都を懐はん（国には人材がなく、私を分かってくれる者もない。どうして故郷を思ったりできようか）。屈原は「何ぞ国を去らん（なぜ国を去らないのか、立ち去ってしまえばいいのに）」と考えたこともあったが、結局、国を去らず、どこへも行かなかった。これはまさに屈原が自分の精神と文化を堅守したことの表れだと言えよう。

現在では、端午節（旧暦の5月5日）になると、中国各地で屈原を祀るというテーマを際立たせ、曲がったことを嫌い、国と民を愛した屈原の精神を称え、端午節と屈原に関する物語を語り、古詩の朗読やドラゴンボートレースなどのイベントを開催することで、中国の伝統文化について知り、自国への想いを育むよう人々に広く働きかけている。

今日、我々が屈原を祀るのは、屈原に代表される中国の伝統的な士人の、生死に向き合い、勇気を持って未知の世界に果敢に挑んだ「天問」の精神を称える意味がある。屈原は長編詩「天問」の中で、天地の分離、陰陽の変化、太陽・月・星などの自然現象から、神話や伝説、さらには聖賢凶頑（聖人や賢人、凶暴で頑愚な人物）、治乱興衰の歴史にまで問いを投げかけており、さらにその問いから自らの宇宙観、歴史観、政治観を述べている。書物ではなく事実に基づき、あえて懐疑的、批判的であろうとする探究心には感服させられる。

中国の惑星探査ミッションに付けられた「天問」という名称には、実は中国人の伝統的な既成概念への批判精神と科学的真理への探求心が体现されている。古い概念への批判なくして、新しい科学的アイデアを生み出すことは難しい。「天問」が現代の人々に示唆しているのは、従来 of 偏見や凝り固まった歴史観を疑うべきだということだけでなく、絶えず批判し、問い続けていく過程で、思考のブレークスルーと科学技術の革新を求めるべきだということである。

「屈原」は過去から現在、そして未来に至るまで、中華民族の共同体意識の構築に極めて特別な役割を果たす精神的なシンボルである。屈原という偉大な先賢がいなければ、中国の士人達は精神の力を欠くことになり、そして中国の歴史からも悲壮な色合いが少なからず失われていたことだろう。

文明は絶えることなく続き、屈原の精神は末永く受け継がれていく。正しきを守りながらも旧きは捨て、古きを尊びながらもそれに立ち戻らない。そうすることで、私たちは伝統文化に対する自信を伝えているのだ。